

誰がために

2005(平成17)年10月31日鑑賞(松竹試写室)



監督・原案＝日向寺太郎／出演＝浅野忠信／エリカ／池脇千鶴／小池徹平／宮下順子／烏丸せつこ／香川照之（パル企画、マジック・アワー配給／2005年日本映画／97分）

……妊娠中の愛する妻が、何の理由もなく1人の少年の手によって首を絞められて殺されたとしたら……？ そして、その少年の裁判に立ち会うこともできず、わずか1年あまり少年院に入っただけで社会に復帰してくるとしたら……？ そんな今風の、しかしすごく重いテーマを真正面から取り上げた映画だが、さて、その成否は……？ 主人公のパーソナリティを明確に設定し、かつその周辺の人たちの「善意」も明らかだけに、私には主人公の行動は不可解かつ中途半端に見えるのだが……？ もちろんこの映画は観客に何か1つの正しい結論を求めているわけではないはず。そこでさて、あなたの判定は……？

少年犯罪と少年法

大学の法学部における刑法の授業で最初に学ぶ犯罪論は罪刑法定主義だが、刑罰論については応報刑と教育刑の2種類があることを学ぶ。大学では少年法の勉強まで立ち入ることはないが、司法試験に受かり、司法修習生になると、少年法の講義とともに家庭裁判所における実務修習で、少年法にもとづく少年犯罪の処理について学ぶことになる。

少年法を特殊なものとしている基本的考え方は、少年は可塑性に富むためその犯罪を処罰するという観点よりも、少年そのものを更生させるという観点を重視していること。しかし近時の少年犯罪の増加とその凶悪化のため、少年法のこの考え方が時代状況に適合せず、さらに被害者感情に全くマッチしなくなってきていることも事実。そのため近時、少年法の一部が改正されているが、それでもな

お不十分……？

この映画が描くような事態（犯罪）が発生した場合、あなたが無惨な死を遂げた愛する妻の夫だったとしたら……？

舞台と主人公はあの『八月のクリスマス』と同じ……

この映画の舞台は東京の下町にある写真館とされている。そして、その主人公は、急死した父の跡を継いで、今はこの写真館のオヤジに収まっている民郎（浅野忠信）。この設定は、ホ・ジノ監督の韓国映画『八月のクリスマス』（98年）や、近時これをリメイクして日本でも公開された長崎俊一監督の『8月のクリスマス』（05年）と同じ。もっとも、共通するのはそれだけで、他には何の関連性もないが、ついそれを思い出してしまった。

この民郎を演ずる浅野忠信はもともと個性の強い俳優だから、平凡な写真館のオヤジという雰囲気にはなじまないのでは……？ そう思って観ていると、たしかにまずその後ろに束ねた髪形からして个性的……？ そのうえ、1枚の少女の写真を通して語られる彼の身上は、パレスチナへ行き命懸けで報道カメラマンの仕事に取り組んでいたとのこと。

そして、それに一生を捧げるつもりだったが、父親が急死したためやむなくその跡を継いで写真館のオヤジに収まっているとのこと。このようにみると、主人公の人物設定自体が、普通のように普通でない……？

したがって、「ある事件」発生の後、民郎が示す行動が普通のように普通でないのも当然……？

亜弥子とマリ、どちらがいい女

この映画の主人公は民郎を演ずる浅野忠信だが、女優陣としては、エリカと池脇千鶴という甲乙つけがたい2人の美女が登場する。どちらがいい女、という評価は個人の好みによるものだが、私はどちらかというとなりよりも池脇千鶴の方が好み……？

そんなことはどうでもいいが、マリ（池脇千鶴）は民郎の同級生の妹で小さい時からの幼なじみ。そしてマリが大学生の頃は、バイトで民郎の店の手伝いもし

ていたとのことで、家族同然のつき合いをしている様子。そしてマリが大学を卒業した今日は、民郎の写真館でお見合い写真(?)を……?

こんなマリの某美術大学での同級生が亜弥子(エリカ)で、たまたまマリの家に遊びに来ていたという設定だ。

民郎にとって、マリは幼なじみの妹みたいな存在という以上に考えることができなのに対し、どことなく憂いを含んだ亜弥子に対しては魅力を感じ、また民郎がパレスチナで撮った少女の写真が持つ強い目の力に共感したと話す亜弥子に対して、憧れの気持を抱いたとしてもそれはある意味当然のこと。するとその行きつく先は……?

静かだが、女からのはっきりとしたアプローチ!

亜弥子は民郎と最初に出会った時から、民郎に対して何かを感じていた様子。そしてそれは民郎も同じだった。そんな亜弥子がマリとともにこのまちを訪れたのは単なる遊びのためではなく、ある1つの目的があった。それはここでは書けないが、民郎の写真館で20年ほど前に撮った写真の確認をしたいということだ。亜弥子は小さい時に父と別れ、母親(烏丸せつこ)の手ひとつで育てられたためか、どこかで父親を求める気持があり、またそのことが亜弥子の男性に対する気持を引っ込み思案にさせていたらしい。もちろん民郎にはそんな亜弥子の気持や目的はわからないが、亜弥子の要請に応じているうちに2人の距離はたちまち近づいていった。そして何回目かのデート(?)の時、最初に口づけしたのは亜弥子の方から。

ここまでアプローチされれば、いくら鈍感な民郎でも、亜弥子の気持が理解できたらしくそこからは一気に……?

この展開だけを見ていると、こりゃあまりにも安易かなとも思えたが、実はその中にもさまざまな伏線があったことが後に明らかになるから、それはじっくりと映画で……。

幸福の絶頂から不幸のどん底へ……

民郎と亜弥子の結婚が決まり、その祝いの席では何と亜弥子が妊娠しているこ

とも発表され、今や民郎と亜弥子は幸福の絶頂。

民郎の写真館は、民郎と民郎の母親（宮下順子）の2人が住んでいるだけだから、そこに亜弥子が嫁入りしてくればきっと嫁 VS 姑問題も大変だろうと思うが、それはこの段階では発生せず、きわめて良好な状態……。しかしそんな中で発生した大変な事件とは……？

それは買い物に行った亜弥子の姿に魅力を感じ、その後をつけたK少年（小池徹平）から目をつけられたこと。もっともこの少年は特別の不良少年ではない。むしろ父親は中古車販売店をやっており、結構繁盛している様子。そんなK少年は亜弥子の魅力に引きずられるままに、ある日亜弥子の家を訪れたが、その時亜弥子はたまたま1人だった……。もっとも少年は決して亜弥子を殺しにきたわけではない。一体少年は亜弥子に対して何を求めたのだろうか……？

しかし現実には、K少年の手によって亜弥子は首を絞められ殺されるという悲惨な結果に……。

そんな犯罪の口口や状況を詳しく描写することがこの映画の目的ではないため、映画はその具体的状況を全くスクリーン上に表現しようとはしない。それを暗示させるのは、パレスチナで撮ったあの少女の写真が落ちて割れることによって、という手法をとっている。

しかして、お腹に子供を抱えた新妻を無残にも絞殺してしまったK少年の裁判とその処罰の行方は……？

あまりにも無知な民郎にも問題が……？

弁護士の仕事を31年間もやっていると、いろいろな相談者や依頼者に出会うことになる。そんな中で思うのは、1つはそれぞれの人間が持つ価値判断と法律が示す価値判断との乖離であり、もう1つはその乖離を理解する能力を持つ人間と持たない人間との差ということ。

私自身、弁護士として法律上はこうなるということはわかっている、必ずしもそれが正しいと信じているわけではないことは多い。たとえば、「赤信号では停止せよ」と法律上は定めてあっても、誰もいない真夜中の道路で赤信号で止まっている人を見ると「お前はバカか」と思ってしまう。その他いろいろと、私は

弁護士ながらあまり法律を重視していない(?)し、遵法精神の薄い人間(?)という自覚がある……?

それはそれとして、人それぞれでいいのだが、私が1番かなわんなあと思うのは法律がそのようになっているということに対して、「それはおかしい!」「納得できない」と声高に叫ぶ人。この映画を観る限り、主人公の民郎はどうもそういうタイプの男のようだ。

もちろんそれには、パレスチナで人間の死という現実にはやというほど向き合ってきた経験も影響しているのだろうが、映画の中でも民郎に対して説明されているように、日本には①少年法という法律があること、②そこでは処罰よりも更生に重点が置かれていること、③したがって家庭裁判所での審判は非公開であること、④審判には立ち会えないが記録は閲覧できること、など民郎は理解したうえで、自分のスタンスを決めなければならないというわけだ。ところが、映画の中で示される民郎の行動は……?

マスコミ代表(?)の記者は……?

犯罪報道を実名にするべきか否かについては、昨日10月30日(日)の『たかじんのそこまで言って委員会』で、読売テレビの報道局次長に昇進した辛坊アナと橋下弁護士との間で激論が展開されていたが、少年犯罪について実名を公表しないことは昔からのルール。

犯罪報道にもいろいろあるのは当然。この映画に登場する雑誌社の記者(香川照之)がどのレベルの記者なのかはよくわからないが、その取材への執念はそれなりのもの。自分の母親や亜弥子の母親そしてマリのアドバイス(?)にしたがって、事件のことを忘れようと努力している(?)民郎だったから、民郎は記者の取材をはねつけ、与えられた少年の写真や記者の名刺をすぐに燃やしてしまったが……。

情報というのは1度与えられてしまうと、ひとり歩きするもの。そのため民郎は記者からの情報をもとに、遂にある日中古車販売店の店の前に……。すると、そこから先は次々とエスカレートしていくのが人間の業というもの……。さて、その行きつく先は……?

あまりにも難しいテーマ

少年犯罪において、少年への処罰の程度と被害者（遺族）側の被害（感情）の程度がアンバランスになり過ぎていることは、かなり前から指摘されているが、未だに納得できる結論には至っておらず、せめぎ合いの状況が続いている。したがってこの映画が描こうとしているテーマについては、1つの結論を得ようとしてもそれは所詮無理というもの。それは弁護士の私としてはよくわかる。

そしてこの映画では、マリをはじめとして周りの人たちはみんな常識的で善意の人たちばかりだから、民郎に対して「すんでしまったことは忘れる」「マリと新しい人生をつくっていけ」とアドバイスしてくれている。もちろん、民郎自身もそうしようと努力しているのだが、民郎はどうしてもそれに納得できないタイプの男……。果たして、それはなぜ……？

あなたは納得できる、それともできない？

他方、民郎は何度も何度も心の中で葛藤をくり返しながら、遂に最後にはある行動に出ることになる。しかし、その行動は私にはどうも理解できないもの。民郎には悪いが、私は「なぜそんなことをするの。またどうしてそんなに中途半端なの！」という気持ちを抑えることができないわけだ。

映画冒頭に登場してくる「ニケ」の像の頭と右腕が云々、という解説を理解できる観客などほとんどおらず、これは日向寺太郎監督が奇をてらい過ぎたもの……？ そしてまた、今日は民郎とマリをくっつけるべく、民郎の登場を待って騒いでいる仲間たちを、タクシーの中から1人じっと見守る民郎というラストシーンもあまりに抽象的……？

そして私は、こんな結論になるのなら、民郎は亜弥子のために一体何をしたことになるのか、と逆に虚しくなってくるのだが……。

2005(平成17)年10月31日記